2018年12月11日（火）中国新聞

心の性を求めて

手探りの日本 ―2

思春期 いじめの標的に

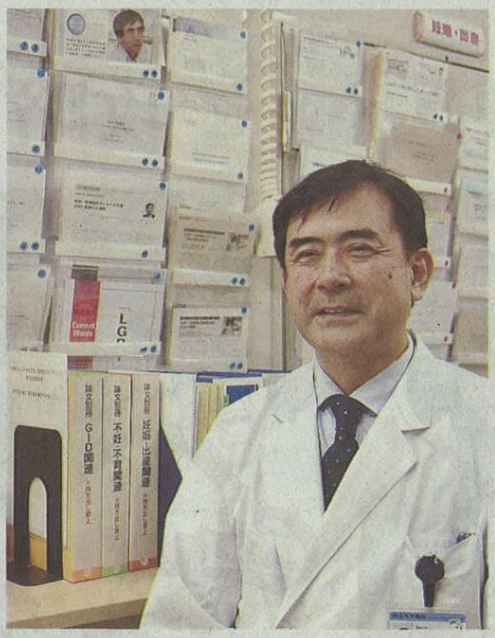
「中学3年の時に『女っぽい』という理由でいじめられた」。ズボンを脱がされ、受け入れられないと感じていた男性の体をさらされた。約5年前、タイで男性から女性の体になる手術を受けた石川理江さん(43)。ショックは今も記憶に刻まれている。

思春期、性同一性障害(GID)の人にはさまざまな葛藤が押し寄せる。幼少期から心と体の性が一致しない違和感を抱き、10～15歳ごろで迎えるとされる第2次性徴。感覚の隔たりが大きくなり悩みは深刻になる。

石川さんのクラスメートもそれぞれ男らしく、女らしく成長した。「男っぽく振る舞ってみたけど、うまくいかなくて空回りした」。戸惑う石川さんの態度がいじめに拍車を掛けた。

石川さんはいじめに苦しんだ頃、GIDを知らなかった。「自分は男なのに女になりたいと思っている変態なのか」と悩んだ。親にも長年打ち明けられず、つらい経験から20代で何度か自殺を図った。

こうした事態を避けるため、思春期から治療する道がある。ホルモン治療の一種である「2次性徴抑制療法」は、男女とも体の変化を一時的に止めることが可能だ。岡山大病院ジェンダーセンターの中塚幹也医師(57)は「体が変化する焦燥感を抑え、最終的に心の性と同じ特徴を持つ体に近づけやすくなる」と説明する。途中でGIDではないと判明すれば治療を中止し、2次性徴を再開できる。



岡山大病院ジェンダーセンターの中塚医師

ただ、心身の違和感を子どもが周囲に的確に伝えるのは難しい。中塚医師らが岡山大の患者を対象に2012年に実施したアンケートでは、小学生の時に打ち明けることができた人は2割に満たなかった。中塚医師は「授業でGIDを肯定的に取り上げる時間を設けると周囲の理解も深まり、本人の告白のきっかけにもなる」と提案する。

費用面も課題だ。2次性徴抑制療法は公的医療保険の適用外で、月2万～3万円の負担となる。大人になってからは心の性に合わせたホルモン投与への移行が一般的。本格的に体の性別を変えたければ手術を受けることになり、さらなる出費が避けられない。「せっかく親が子どもの違和感に気付いて治療を始めたのに、費用を払えずに中断した例もある」

中塚医師らは2次性徴抑制やホルモン投与も公的医療保険の対象とするよう国に働き掛けている。「性別適合手術が保険適用になった。他の治療の重要性についても理解が広がってほしい」と訴えた。

（伊藤元輝＝共同）